古今集「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ」の歌について

長谷川清喜

一　従来の見解
二　問題点
三　下の句の構造
四　「いたりいたらぬ里」の構造
（附）「咲き咲かず」の類の構造
五　本歌取りの歌
六　結び

一

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ（古今、二・九三）

これは、題しらず、よみ人しらずの歌である。歌の本文についてみるに、古今和歌集綜覧と崇徳天皇御本とによれば、第二句は、公任切・亀山切・崇徳天皇御本では「いたるいたらぬ」であり、清輔本では「いたりいたらぬ」の「り」のかたわらに「る」が書きそえてある。他の諸本では、すべて「いたりいたらぬ」である。第五句は、公任切に「花の見ゆるか」とあるほか、いずれも「花の見ゆらむ」である。

歌の解釈については、従来、宣長の古今集遠鏡をはじめ、その前後の注釈書、すなわち、契沖の古今余材抄、真淵の古今和歌集打聴、景樹の古今和歌集正義、近くは金子元臣の古今和歌集評釈、窪田空穂の古今和歌集評釈等、ほとんどその見解を一つにしている。（それらの基づく本文は、皆、流布本のそれにひとしい。）すなわち、

春ノ色ハドコモカモヒラ一マイナレバイキワタツタ里トイキワタラヌ里トノワケヘダテハアルマイニ　ドウ云コトデ花ハ咲タ所トサカヌ所ガアルコトヤラ（遠鏡一　傍線は、同じく遠鏡に「かたへに長くも短くも、筋を引たるは、歌にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり」とある。）

という作意のもとによまれたものとしている。

これに対して、西下経一氏は、「あるいは、到らぬ里を強めて、いたりを添へたものか」（日本古典全書　古今和歌集六〇頁頭注）として、一つの疑いを添えられた。

亀井孝氏は、下の句は、「『さけるさかざる』の方はいいが」と

して、従来の解釈を認められるが、上の句については、語学的には宣長流に解する根拠がないから誤りであるとして、次のような、文法上の分析すべき文の構成と、それに基づく解釈とを示された。（金田一博士古稀記念　言語民俗論叢所収「古今和歌集の註釈のために」三一九―三二一頁）

（（いたりいたら）→ぬ）→さと　と分析すべき文の構成で、否定の「ぬ」は、「いたりいたる」といふかたちを、否定してゐるものである。したがつて、いひかへの技術のうへでも、

春の色の方は、いたりふたつて、いたらぬ里とてないのになぜ、花の方は……

といふやうな表現を利用すべきである。当然、この方が、原歌のいきほひをつたへてゐる。

そして、氏は、同じところで、こういわれる。すなわち、

しかし、宣長流の解釈は、よほど、ふるくからあつたものとみえる。それは、流布本のほか、元永本、筋切、昭和切ではすべて「いたりいたらぬ」であるが、公任切、亀山切では、ここを「いたるいたらぬ」としてをり、さらに、清輔本は、「り」のかたはらに、「る」をかきそへてゐるところから、うかがはれる。しかし、「春の色のいたるいたらぬ里はあらじ」といふ表現は、意味をなさないものである。それは、つぎの例からあきらかである。すなはち、「春の色のいたるいたらぬ里はあらじ」に、ぴつたり対応する現代語の表現「春の色のいたる里といたらぬ里とはあるまい」は、意味をなさないことばである。

「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ」についての、これまでの見解は、大略、以上に述べた通りである。これを次の二つをもつて代表させることができよう。

一　宣長の見方

「いたりいたらぬ里」の構造は（いたり・いたらぬ）→里で、解釈は

「いたった里といたらぬ里と（ノ違イ）」

一　亀井氏の見方（西下氏のものも、一往、これに含めることができる）

「いたりいたらぬ里」の構造は　（（いたりいたら）→ぬ）→里で、解釈は「（いたりいたって、十分いたりきらぬ里」

（・は、その上下が修飾等の文法的結合関係にないことを示し、→は、その上下が文法的に直接関係し結合することを示す）

この二つの説について検討してみようとするのが、本稿のねらいである。

二

前項で見た通り、原歌の上の句には「いたりいたらぬ里」と「いたるいたらぬ里」との二つのかたちがあって、「いたるいたらぬ里」の方を問題にしたのは、ひとり亀井氏のみである。しかし、今問題とする宣長・亀井両説の基づいたものは、ともに「いたりいたらぬ里」のかたちである。

ところで、宣長説ではその基づいた根拠を示していないのに対して、亀井説ではそれを示している。両説の検討は、この示されなかったところの根拠を探り、示された根拠を確かめることにほ

かならない。まず、既に示された根拠を確かめることから始めようと思う。

亀井氏によって「いたるいたらぬ里」のかたちがしりぞけられた根拠は、このかたちにぴったり対応する現代語の表現が「いたる里といたらぬ里」であり、これが下に否定を伴なって「いたるいたらぬ里はあらじ」となることによって、原歌の上の句が意味をなさない表現となる、というところにあった。それならば、この同じ形「いたるいたらぬ里」は、下に否定を伴ないさえしなければ、許されるのであるか。また、下の句についての「『さけるさかざる』の方はいいが」ということは、右のかたちの許されることを意味するのであるか。しかし、このことについては、明らかにされていない。

ともかく、前項に引いた宣長、亀井両説の見解から、次のように見なすことができる。

宣長……　いたりいたらぬ里
　　＝
　　いたる里といたらぬ里
　　＝
亀井……　いたるいたらぬ里

かく見ることが許されるならば、亀井氏は、「いたるいたらぬ里」の構造を、

（いたる・いたらぬ）→里

として、これを「いたりいたらぬ里」と区別された、と考えられる。このことはまた、同時に、「咲ける咲かざる花」をも

（咲ける・咲かざる）→花

として把握されたことを思わせるのである。

しかしながら、それでは何故に「いたるいたらぬ里」「咲ける咲かざる花」の構造が右のように見なされなければならないのか、また「いたりいたらぬ里」の構造が何故に

（いたりいたら）→ぬ→里

でなければならないのであるか、という点については、やはり、いっさい触れておられないのである。

以上によって、宣長説においてその根拠が示されなかったと同じく、亀井説においても、結局、その根拠は明らめられていないことを知るのである。

三

宣長説において、「いたりいたらぬ里」と、「咲ける咲かざる花」とでは、

かたちの上では、（―は、単なる語の配列の順を示す）

連用形―未然形―連体形―体言
命令形―連体形―未然形―連体形―体言

という、明らかな違いがあるにもかかわらず、解釈の上では、

いたった里といたらぬ里
咲いた花と咲かない花

というふうに、あたかも両者が文法上の構造をひとしくするかのごとき言いかえがなされるのは、何故であるか。まず、「咲ける咲かざる花」の構造を考えようと思う。

これに類似する実例には、次のごときものがある。

知る知らぬ逢坂山のかひもなし霞に据うる関のよそめは（後撰遺愚草、上・九六五二）

知る知らぬ一つ木かげに立ちよりて契りをむすぶ山の井の水
（千五百番歌合、七・三六七〇八　小侍従）

右の「知る知らぬ」は、二例ともに、語順としては体言に続いている。しかし、下の体言「逢坂山」ないし「逢坂山のかひ」、あるいは「一つ木かげ」に、文法的に連なるものとは見なし得ないこと、明らかである。

「知る知らぬ」は、

知る知らぬ何かあやなく分きていはむ思ひのみこそしるべなりけれ（古今一一・四七七　業平）

かれこれ、知る知らぬ、送りす（土佐）（これは散文の例）

知る知らぬ分かぬ霞の絶え間より主あらはに薫る花かな（拾遺愚草上・九五六〇）

によって知られるごとく、下に対して連用的関係に立つものと見なければならない。その構造は、右の例の「分く」「かれこれ」の示す通り、

（知る・（知ら）→ぬ）→用言

と分析すべきものであって、「知る」と「知らぬ」とはそれぞれが体言の資格で相対するものであることが知られるのである。

そこで、今、一句中の同じ用語、あるいは、それに助動詞（ここでは否定の助動詞を除く）のついた、いわゆる活用連語を、Aで表わすこととして、右の構造を図式的に示せば、次のようになる。

（Aの連体形（知る）・Aの未然形（知ら）→ぬ）→用言

次の例も右の型である。

皆人を同じ心になしはてて思ふ思はぬ無からましかば（和泉式部集、二・四〇五七六）

別れてはあはむあはじぞ定めなきこの夕暮や限りなるらむ（拾遺、六・三一二　よみ人しらず）

秋に又あはむあはじも知らぬ身は今宵ばかりの月をだに見む（詞花、三・九五　三条院）

あふことを苗代水にまかせてはこさむこさじは小山田の関（古今六帖、二・三一九〇四　まとの左大臣）（ただし、この作者は確かではない。この歌は、夫木抄雑三に「よみ人しらず」とある。）

このようにして、この型はまた次のように示すことができる。

（非Aは、Aの対義語的なものを意味する）

（A（連体形）・非A（連体形））→用言

そうすれば、次の諸例もこの型に属する。

おふなおふな思ひはすべしなぞへなく高きいやしき苦しかりけり（伊勢・一八二）

朝戸あけて都の宿を見渡せばたかきいやしき雪ぞ積れる（壬二集、上ノ下・一三三六〇）

さぶらふ人々につけて、心かけ聞え給ふ人、たかきいやしきもあまたあり（源氏、澪標――対校源氏物語による）（散文の例）

花をのみ尋ねこしまに春はまだ深き浅きも知られざりけり（大江千里集・二一〇〇九）

菊の花こきもうすきも今までに霜の置かずは色を見ましや（躬恒集・一五三八三）

小山田のもるもるぬも世の人のすべては仮の宿りなりけり（和泉式部集、二・四〇五九三）

死ぬばかり歎きいりてぞ音はせぬ知るも知らぬもとふはとふかは（津守国基集・二五四六九）

（cf久方の月をさやけみ紅葉の濃さも薄さも分きつべらなり（躬恒集、一五五六二）

これらによって知られるのは、

A（連体）―A（未然）―否定の助動詞（連体）

ないし

A（連体）―非A（連体）

のかたちが示すところの構造は、いずれも

（A（連体）・非A（連体））→用言

である、ということである。裏からいえば、この型の構造を持つ例で下に対して連体的関係に立つと見るべきものは、見出し得ない、ということである。

従って、「咲ける咲かざる花」も、

（咲ける）・（咲かざる）→花

とは見ることのできない構造で、やはり、

（咲ける）・（咲かざる）→花

と考えるほかはないのである。それ故、原歌の下の句は、たとえ、意味の上では「咲ける咲かざる」が「花」を修飾するかに見えようとも、文の構造そのものからは、実は、「花の、咲ける咲かざる、見ゆらむ」であることを認めないわけにはゆかないのである。かかる文節の布置は、修辞上の技巧によるものと考えられるのであって、破格とはいえないものである。

「咲ける咲かざる」が「花」の連体修飾部たり得ないという事実は、「いたるいたらぬ」が「里」の修飾部ではあり得ないことを物語る。なぜなら、「いたるいたらぬ里」は、明らかに

A（連体）―非A（連体）―体言

のかたちであって、これを

（A（連体）・非A（連体））・体言

ないし

（A（連体）・非A（連体））→用言

の型の構造でない、とすることは許されないからである。

四

「いたりいたらぬ里」はいうまでもなく、

A（連用）―A（未然）―否定の助動詞（連体）―体言

のかたちである。これはいかなる構造に分析されるべきであるか。類似の実例を示そう。

板びさしさすや萱屋の時雨こそ音し音せぬ方は分くなれ（千載、一八・一一八七　顕昭）

咲き咲かぬ所もわかず吹く風は散るこそ花のさかりなりけり（弁乳母集・二四九一一）

咲き咲かぬ梢の花もおしなべてひとつ薫りにかすむ夕暮（風雅、二・一三四　朝平門院）

生き死なむことの心に叶ひせば再び物は思はざらまし（拾遺、一五・九二八　よみ人しらず）

生き死ぬる習はすべて幻の花見る宿に山嵐の風（拾玉集、四・四四六四）

おそくとき緑の糸に著きかな春くる方の岸の青柳（拾遺愚草、上・八九五五）

薄く濃き四方の紅葉を吹き分けてかたも定めぬ木枯の路（拾遺愚草員外・二〇六七　定家）

薄く濃き紅葉流るる飛鳥川変る淵瀬は色に見えけり（壬二集・一三〇九六）

薄く濃き野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え（新古今、一・七六　宮内卿）

知る知らぬ苦しき海の人を見て渡さむと思ふ蜑の釣舟（源師光集・二九〇一四）

荻の葉も同じ籬の女郎花しのびしのばぬ秋風ぞ吹く（壬二集・一四二二〇）

いかにせむ心くらべになりはてて訪はれ訪はれぬ夕暮の空（新続古今、一三・一二三六　法印定為）

右は、大方、時代のくだるものであるが、古今時代の例には

薄く濃き色は紛へど花といへば一つ顔にも見えわたるかな（興風集・一六六九五）

がある。なお、右の拾遺集のよみ人しらずの例もこれに数えられようか。

以上の諸例はいずれも

〔A(連用)・(A(未然)→ぬ)〕→体言

あるいは

(A(連用)・非A(連体))→体言

の構造に分析すべきものであって、しかも、時代の違いによる差は認められない。そこでこれを一括して

(A(連用)・非A(連体))→体言

で表わせば、次の諸例もまた同じ型と見なすことができよう。

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ（古今、一三・四六七　業平）

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき（新古今、一・五五　大江千里）

このように見てくれば、

A(連用)—A(未然)—ぬ—体言

のかたちは

(A(連用)・A(未然)→ぬ)—体言

の構造に分析され、これはさらに

(A(連用)・非A(連体))→体言

の型として把握し得るものであること、明らかである。

従って、「いたりいたらぬ里」も、当然

(いたり・いたらぬ)→里

の構造に分析すべきである。

附

なお、この事を傍から支えるものとして、次のかたちの例を挙げよう。

難波潟汐ひ潮みち常なれば思ひ思はず見えぬるものを（古今六帖、三・三二六四〇　山口女王）

かすかずに思ひ思はずとひ難み身を知る雨は降りぞ増れる（業平集・一六一五二）

散り散らず聞かまほしきをふる里の花見て帰る人も逢はなむ（拾遺、一・四九　伊勢）

咲き咲かず我にな告げそ桜花人づてにやは聞かむと思ひし（後撰、二・六一　大将御息所）

鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず伊勢まで誰か思ひおこせむ（源氏、賢木）

散り散らず見る人もなき山里の紅葉は闇の錦なりけり（和泉式部集、二・四〇四三）

咲き咲かず覚束なしや桜花ほかの見るらむ人に問はばや（栄花、浅緑　土御門御連）

咲き咲かず里分く影を験とて月なき宵に冴ゆる卯の花（拾遺愚草員外・一二〇九七　定家）

聞き聞かず同じ響も乱るなり嵐のうちの暁の鐘（風雅、一六・一六二二　進子内親王）

その他、「越え越えず」（拾遺愚草下・一一〇八四）「さはりさはらず」（拾遺愚草員外・一一四六八　定家）「知り知らず」（千五百番歌合二〇・三八九一〇　前権僧正）「すみすまず」（源賢法眼集・二五二一七）「ゆきゆかず」（定頼卿集・二四五八八）「うつりうつらず」（朝光卿集・二四四三一）あるいは「見も見ずも」（大和・七二）「をりもをらずも」（伊勢集・一八四五四）等を見ても、右の歌をはじめ、これらの例はすべて、「咲き咲かず里分く影を験とて」が示すように、その構造は

（A（連用）・A（未然）→ず）→

あるいは

（A（連用）・非A（連用））→

と見るべきであって、少くとも

←（A（連用）→A（未然））→ず）←

と考えられないことだけは確かである。やはり、次の例が示す構造と同型であると考えなければならない。

浮き沈み淵瀬流るる紅葉に深く浅くぞ色は見えける（伊勢集・一八二五一）

この事実は、もって、「いたりいたらぬ」の構造を

（いたり・いたらぬ）→

と見るべきことの傍証とするに足りよう。

かくて、三項、および本項に述べたところによって、「『春の色のいたるいたらぬ里はあらじ』にぴったり対応する」といわれた、現代語の表現「春の色のいたる里といたらぬ里とはあるまい」は、実は、「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ」にこそ、「ぴったり対応する」というべきであったのである。

ただし、この表現は「意味をなさないことばである」とされるのであるが、これについては項を改めて考察することとしよう。

五

既に見て来たところによって、「いたりいたらぬ里はあらじ」の構造は、一往明らかになったかと思ふのであるが、なお一抹の不安を禁じ得ない。なぜなら、このかたちに類似の例はあるけれども、「いたりいたらぬ」そのものの用例は、古今時代およびそれに近接する前後の時代において、見出し得ないからである。原歌のほかにこのかたちの現われるのは、院政時代末期ないし鎌倉時代である。しかも、そのすべては、原歌をふまえたもののみである。それ故、極端な言い方をすれば、原歌は、〈これに限って、あるいは特殊な例であるかもしれない〉のである。

そこで考えられることは、これをふまえた、後の歌人達の、そのふまえ方、受取り方を見ることによって、原歌の構造を明らかになし得る手がかりが得られはしないか、ということである。そ

れは、類例について、既に見るごとく、古今時代から鎌倉時代までの間に、構造上の変化のないことが認められるからである。

さて、「いたりいたらぬ」を用いた本歌取りの歌は次の六首である。

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじただ我からの露の夕暮（新古今、四・三六六　長明）

春風のいたりいたらぬ木木ぞなき咲けるが散れば咲かざるも散る（拾玉集、六・六二九六　以二古今一為二題目一とある）

春風のいたりいたらぬ際（きは）ぞなき咲けるがちれば咲かざるも咲く（千五百番歌合、三・三六〇九七　前権僧正）

山陰は猶待ちわびぬ桜花いたりいたらぬ春を恨みて（拾遺愚草中・一〇二七八）

初瀬山嵐の道の遠ければいたりいたらぬ鐘の音かな（新勅撰、一七・一一七七　二品親王道助）

染め残す梢にぞ猶秋の色のいたりいたらぬ程も見えける（新葉五・三九二　公冬）

右のうち、第二と第三の歌は、同じ歌の異伝にすぎないので、実は五例である。

この五例にも、さきの立論を破るべき積極的根拠は見出し難い。とすれば、この時代の歌人達も、なお、原歌を正しく受取り正しくふまえていたとすべきであろう。つまり、これら本歌取りの歌に見られる用例もまた、既に見た数多くの類似例におけると同様の構造に分析されるものであって、例外ではないと考えてよいと思われる。従って、原歌の上の句の構造も、上述のごとくに認めて、さしつかえないと言えよう。ここにおいて、前項の終りに挙げた問題を取り上げなければならない。

もし、「いたりいたらぬ里」を、

（いたりいたら）→ぬ→さと　と分析すべき文の構成で、否定の「ぬ」は、「いたりいたる」といふかたちを、否定しているもの

と解し、

（いたり・いたらぬ）→里はあらじ

では「意味をなさないことばである」が故に認めがたい、とする見方に立つならば、右の本歌取りの第五例は、いかに解すべきなのであろうか。「いたりいたりぬ鐘の音」を

（いたりいたら）→ぬ→鐘の音

と見るならば、「かな」という詠歎は、聞えない鐘の音に対する表現となって、「意味をなさないもの」になりはしないであろうか。

さらにまた、かかる見解に立つことは、実例の示す文の構造を無視する結果、その根拠とすべき文法的事実に、みずから背くこととなる、と考えられるのである。

それならば、「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ」という表現は、どのように考えるべきであるのか。原歌は春下の、九〇番からはじまるいわゆる「花の歌」に属し、この巻のはじめから約三分の一の位置にある。これは、古今集の歌の配列順を考え合わせると、春もすでにたけなわをやや過ぎた時期であることを意味する。従って、撰者は、少なくとも、この歌を、春の色の遍くゆきわたった時期のものと認めていた、そう考えて誤りはない。

そこで、わたくしは、次のように考える。

作者は、春の色の「ドコモカモヒラ一マイナ」事実を、自他ともに認めていることを、百も承知の上で、花の「咲ける咲かざる」ということに対する顧慮から、その事実を、ことさら強調しようと想図したのであって、この表現は、その為にえらんだものである。

と。

思うに、この種の表現は、あえて和歌に特有の、発想の問題と見るに及ばない、そして、今日においても、まま見られるものである。例えば、漢文訓読における「絶えて無くしてわづかにあるのみ」、あるいは、日常会話における「いやもおうもない」「是非なく」「いやあ、寒いの寒くないの、全く……」など、これに類する表現といってよいであろう。

六

なお残る問題としては、「いたるいたらぬ」のかたちがある。ことに、清輔本のそれは、一方では本歌取りが例外なく「いたりいたらぬ」のかたちでなされている時代であり、しかも、それが校合であるだけに、一そう、単純には片附け得ないものを含むことを思わせる。しかし、本稿にとっては、直接影響のないことである。

こうして、わたくしは、原歌の解釈を、あらためて宣長説に復したいと思うのである。

大方の御批正御教示をひたすらお願いする。

追記

本稿で取扱った問題は、その性質上、鎌倉時代までの歌を中心としたもので、散文における調査はつくしていない。それ故、たとえば増鏡の「薄く濃き野辺……の」の歌に続く「草の緑のこきうすき色にて」（おどろの下）のような例は、未解決として残ることを言い添えておく。

—北海道学芸大学助教授—